

黒田龍之助著

①『羊皮紙に眠る文字たち
スラヴ言語文化入門』

現代書館, 1998 年, 237 頁

②『外国語の水曜日
学習法としての言語学入門』

現代書館, 2000 年, 293 頁

神 山 孝 夫

①『羊皮紙に眠る文字たち』はその副題が示すようにスラヴ言語文化の、あるいはむしろいわゆるスラヴ文献学の平易な入門書である。ロシア語を学びはじめたばかりの学習者、あるいはかつて学んだことはあっても忘れかけている人たち向けの基礎的な知識の確認にはじまり、若干の辞書の紹介を経た後で、徐々にロシア語のかつての姿と他のスラヴ語が紹介されてゆく。ロシア語の正書法の変遷、スラヴ語の数、格のカテゴリーの発達、フォードロフの文字教本、スラヴ諸文語の成立、白樺文書、古代教会スラヴ語成立の経緯、キリール文字とグラゴール文字の紹介などが、あまり微に入り細に入ることなく、軽いユーモアを交えて実に軽妙なタッチで綴られ、話題はさらにベラルーシ文語成立におけるスカリナへの役割、アラビア文字で書かれた通称キターブ（アラビア語で「本」の意）、偽作が疑われているいわゆるヴェレスの本のようなかなりマニアックな内容にまで及んでいる。著者は自身の文体を軽薄であると謙遜しているが、むしろこのユーモラスな語り口のために初学者にはとても読みやすいものに仕上がっている。例えば、ロシア語からの重訳とはいえ、ここに載せられたものほどわかりやすいフラブルの訳は正直言って見たことがない。ロシア語を学び、その歴史、あるいは他のスラヴ語へと手を伸ばそうとしている人たちに、入門としてまず一読を薦めたい一冊が出版されたことを誠に喜ばしく思う。

だが、序章に謳われるように「特に文字に焦点をあて」（11 頁）の方針を採り、キリール文字が基本的にギリシア文字のウンキアリス（アンシャル）書体に由来している点、並びにグラゴール文字の起源について様々な議論がある点にせつかく触れた（152-53 頁）のなら、さらにこの方針を貫いてほしかったとも感じる。完全に独創的な文字体系が個人の手によって短期間で作り出されるとは考えにくく、グラゴール文字の場合もその大部分がギリシア文字のミヌスクラ書体から来ていること、それで足りない部分、例えば ш, ъ, ѣ に相当するグラゴール文字と、さらにそこに由来するキリール文字はヘブライ文字の shin, tsade, その異

体（あるいはそれに当たる他のセム文字）から借用されていることなど、詳細は他所に譲るが、大部分のグラゴール文字とキリール文字のルーツはほぼ明らかであって、このような情報やローマ字との関係などを紹介することによって読者が受ける恩恵は大きかったはずである。

常々残念に感じることだが、ことスラヴ語に限らずわが国の言語史研究ではもっぱら文献学的手法のみが重んじられ、比較言語学的な理解が決定的に不足している。21 頁の記載からも著者がスラヴ祖語再建に対して懐疑的な姿勢を採っていることが窺われ、スラヴ祖語についてさらなる言及はないが、このような文献学偏重の態度が読者に受け継がれることがあってはならない。文献学においては問題の文献が記された言語の言語的後裔、すなわちスラヴ語の場合ならスラヴ人が圧倒的に有利である。この点で大きなハンデを負っている我々が学界に貢献できることがあるとすれば、それはむしろ比較言語学的研究の分野であると信じる。

明らかな誤りを二点指摘しておく。「ロマンス語」とはローマ帝国内に根付いた俗ラテン語が各地で発達を遂げた諸言語の総称であるため、15 頁以下でこれをゲルマン語派やスラヴ語派と同格の語派名としているのは適当でない。一般的呼称「イタリック語派」への訂正が必要である。77 頁の表に見える *суть* はもちろん *суть* の誤記である。

②『外国語の水曜日』は著者の外国語教育観を綴ったエッセー集である。

第一章「水曜日の外国語研究室」では著者が教育現場で経験した様々な事例が記されている。5 日間でポーランド語を叩き込まれた「実験用モルモット」チュウ、「世界一苦しみながらムーミンを読む男」アンドレイ（暗奴隷）、講読の授業での経験談、句会に倣った「翻訳の宴」、受講生にテストを作らせた話などが軽いジョークを交えて紹介されており、とても楽しい。その途中に著者が受けた韓国語、トルコ語、イタリア語の集中レッスンのこぼれ話が挿入されている。イタリア語と一緒に学んだ Y さんって一橋のお美しい YN さんかな？ 教師役のヴィオレッタさんのご主人って青学の SM 君かな？ など思いをめぐらせながら拝読した。第二章「外国語幻想」を読めば、読者は外国語学習に対して一般的に流布している偏見に気付くことだろうし、第四章「本と映像に見る外国語」もとても役立つ。

これらの章はアカデミズムとは無縁だが、著者の外国語に対する愛がひしひしと伝わってきて、読者に

「ひとつ～語でもやってみようかな」というやる気を起こさせる、不思議な魅力を秘めている。「ことばは手段に過ぎない」とかわかったようなことを言って外国語学習にいまいち真剣になりきれない学生諸君に一読を勧めてみようかと思う。

第三章「学習法としての言語学入門」は基本的に著者の講義録であり、章名が本の副題と一致するからには、この本の中心的な部分を成すと思われる。確かに言語学の素養をまったく持たずに外国語を学ぶのは恐ろしく非効率的なことであり、学習効率を上げるのに直接つながりそうな言語学的知識をかい摘んで紹介する試みは意味のあることである。著者が勤務する理系専門の学校の学生や、独習者には特にその恩恵があることだろう。

とは言え、この章には特に音声学や比較言語学に関して同意できない点も散見される。その中でも下記の点はどうしても指摘しておかねばならない。

「19世紀、スイスの言語学者ソシュールは、この共時態研究を通時態研究よりも上に位置付け、すなわち重要視して、現在でもこの見解が一般的となっている」（158頁）は完全な間違いである。共時言語学と通時言語学との区別を行なった有名な「一般言語学講義」がはじめて行なわれたのは1907年、すなわち20世紀に入ってからのものであり、彼は確かに彼の用語で言えば通時言語学一辺倒であった当時までの言語研究のアンチテーゼから共時的研究の重要性を説いた。しかし、それは一時点での言語状態の把握をまず行ない、二時点間での言語状態の変遷を扱うのはその次に行なわれるという方法論的に当然の順序を指摘しただけのことであって、共時的研究を通時的研究より重要視したわけではない。この点はバイイとセシュエによる講義録によっても、ゴデルやエングラの詳細な研究によっても確認されることである。案外知られていないようだがソシュールは当時最先端の印欧語比較言語学者、つまり通時言語学のばりばりの専門家であって、有名な「講義」は学校側の要請によって晩年にたった三回行なわれたに過ぎない。詳細は割愛するが、高い評価を受けている専門家が自分の研究の存在意義が失われるような発言をするはずがないことは自明である。ソシュールに関するこの種の誤解はよく目にするし、もちろん黒田氏の責任を問うべきではないのだろう。しかし、やはり誤解の拡大再生産は容認できない。

（かみやま たかお・大阪外国語大学）

佐藤正則著

『ポリシェヴィズムと「新しい人間」』

水声社、2000年、280頁

大須賀 史 和

ロシア史の中には、それこそボリスとグレープの昔から、数多くの魅力的な敗者たちがいた。それはソヴィエト時代になってからも同様であり、また今に至ってもなおそうであるかもしれない。そのいずれの場合においても避けがたい時代の厳しさのようなものが刻印されているわけだが、とりわけ敗者たちが自らの世界観や理念に殉じている時、地上の闘争では敗れ去ったとしても、ヴェーバーの言う「神々の戦い」にも似たある種の神話的闘争の場へと転移することで、後の歴史の中に、特に歴史研究という場において妖しい光芒を残すことがある。

佐藤氏が長年にわたって取り上げてきたボグダーノフも、一度はポリシェヴィキの指導的理論家の座を占めながらも、その後レーニンによって主流から追われ、最後には自らの理念に基づく血液交換の実験によって落命した不運の思想家として、今日の歴史学や文化研究において再び脚光を浴びつつある。本書はこれまでのボグダーノフに関する氏の研究成果の上に、バザーロフやガスチェフ、ケルジェンツェフなど、ソヴィエト初期の文化・芸術・労働問題など様々な分野において独自の功績を残した理論家たちにまで目配りをしながら、ソヴィエト初期という時代の底流に垣間見られる彼らの独特な世界観や理念を浮き彫りにした労作である。ここ数年のロシアでの全体主義芸術研究の代表作とも言えるグロイスの『全体主義芸術スターリン』の邦訳と並んで、今日のソヴィエト文化研究における一つの方向性を明示しているという点でも、本書の持つ意義が極めて大きいことは明らかである。単なる思想研究の枠組みを超えて、文学や他の芸術ジャンルの研究に携わる者全てにとって大きな拠り所を与えてくれると思われる。

なかでも、後半部分に生き生きと描写されているように、ソヴィエト初期の芸術・文化運動のリアリティの源泉が、ボグダーノフの唱えたような形での「新しい人間」の創造という独特の「生の感覚」にあったこと、そしてそれが後の芸術・文化運動や労働改善の中で現実に具体化されていたという指摘は極めて明快で説得力に満ちている。表面上はポリシェヴィキの理論家としての公式な地位を失ったとはいえ、ボグダーノフ的な思想が多くの領域にまたがって大きな影響を残